展示の舞台裏

園田 直子（そのだ なおこ） 文化資源研究センター

民博で開催中の「インド サリーの世界」展、色とりどりのサリーが、私たちの目を奪う。独特の風合いと装飾をダメージから守り、サリーをより美しく展示するために、舞台裏ではたくさんの工夫が積み重ねられた。

資料にやさしいシワとり

今回の展示資料には、金糸、ミラー、コイン、刺繍のように凹凸があるだけでなく、折れたり切れたりしやすい装飾がほどこされているものが多い。これらの資料には、インドでの購入当初からの折り目に加え、輸送時あるいは保管時のシワがついていた。衣類のシワをとるには、家庭ではアイロンをあてるが、博物館の資料では、シワひとつをとるにしても、資料に安全な方法を考える。むやみに高温のスチームアイロンをあてて、布の織目、凹凸のある装飾の独特の風合いをつぶしてしまうことはできない。資料にもっとも負担を与えない方法から始め、様子をみながら次の方法へ移ろう。シワを無理して完全にとるのではなく、気にならない程度になればいいと考え、カタログ用の写真撮影に間に合わせた。

シワをとる作業をおこなったのは開幕五カ月前である。サリーなどの平らな布は平置きにして、縫製されている衣装はマネキンに着付けるといったように、それぞれに一番無理のない状態に置いて、自然にとれるシワは時間をかけてとっていった。

金糸、ミラー、金属のコイル状の装飾品、刺繍、凹凸のある織目など、さまざまな装飾がほどこされた資料

サリーを平置きした収蔵庫の一角

しかし、六ヤード（約五メートル四〇センチ）もの長いサリーを端から端まで平置きするのは、現実的には不可能である。そこで、パッルーを中心に平置きすることにした。パッルーとは、サリーを着用したとき、端に垂らす部分にあたり、豪華な装飾がほどこされている。収蔵庫の一角には大きな台紙をいくつも置いた移動棚を並べ、その上にサリーを平置きしていた。

すでに立体縫製されている衣装は、なかに人の体が入ってはじめて形になる。それぞれの衣装に合わせてマネキンの胴体に薄葉紙と綿を巻き、衣装を支える人体を再現した。肩から胸にかけて綿枕をつめたり、折りたたんだ和紙を挟んだりして徐々に形を整えていくと、衣装はきれいな流れを取り戻していった。このように衣装をマネキンに着せるだけでも、軽いシワはほとんど目立たなくなった。

展示資料の衣装を着せたマネキン。衣装の下には薄葉紙や綿枕が巻いてある

シワが深くついた資料は平置きにするだけでなく、様子を見ながら部分的に重しをのせていった。効果がない場合、ごく軽く湿り気を与える手段をとったものもある。まず布の端の目立たない部分で染料の耐水性を確認してから、大判の濾紙（ろし）を、手でふれて湿っているか湿っていないかという程度に濡らす。その濾紙を資料の下に置き、布に湿り気を与えた後、軽く重しをのせることでシワをとっていく。

山繭のシルクで織られたごく薄いサリーは、このようにしてシワをとった例である。

マネキンに着せただけでは、シワのとれない衣装もあった。たとえば虹色の薄手のドレスは、もともと布全体が縦方向に細かくシワ加工がされているが、横断するように、折りジワがついてしまっている。縦のシワはとらずに、横のシワをとらなければならない。最終的には、ぜんそくや花粉症などの吸入治療に用いられる超音波式ネブライザで精製水を噴霧させることにした。ドレスをマネキンに着せて形を整えた後、風量を調整しながら霧化した精製水をあて、布を軽く縦方向に引く。湿らすといっても、手で触れても濡れているのが感じられない程度だが、横シワはきれいにとれていった。

山繭のシルクで織られた非常に薄手のサリーの場合、下に精製水で軽く湿らせた濾紙を置き、シワをとった

布を傷めず巻いて収納

装飾の多い資料は、取り扱うときに布と装飾部分がふれあい、布に傷みが生じるおそれがある。資料を安全に調査、撮影、保管できるように収納・保管方法にも工夫をしている。

サリーなどの長い布は紙管に巻いているが、布の厚み、装飾の有無や位置関係、表布と裏布のちがいなどに応じて、紙管の直径や巻き取り方を変えている。この微妙な作業をおこなっ

ネブライザから霧化した精製水をあてて、シワをとった

未来へひらく ミュージアム

てくれたのは、当時の研究機関研究員の増田久美氏である。

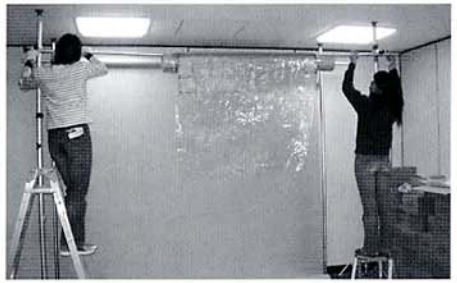
布地に厚みと凹凸があり、容易に折れたり切れたりする装飾が広範囲にほどこされているものは、装飾部分が重ならないように注意しながら、直径の大きい紙管に巻いている。これは、巻く回数を最小限に抑えるためである。同時に、不織布をあいだに挟むことで、凹凸を緩和している。表と裏の両面に装飾があるものは、巻き取るときにシワがでやすいので、とくに慎重にあつかう。

薄い布地でも、部分的に装飾がほどこしてあるものは、一枚の布に厚みの差が大きくでるので、直径の大きい紙管を使用した。ただし、重量はたいしてないので、薄くて軽い紙管で対応できる。薄い布地の場合には、不織布をあてることでよけいなシワがつきやすくなったため、使用は避けた。

布地の厚みが均一なものは、比較的直径の小さい紙管に巻いている。布地の厚みによっては巻き取るときに不織布をあて、布どうしが重なり、圧迫されるのを緩和している。

いずれの場合も、資料が紙管や不織布に直接接触しないよう、フィルムで保護している。資料を巻き終わった紙管は、左右に台を置いた上に浮かせるように収蔵し、巻き取った資料の下部が床でつぶされないようにしている。現実的には収蔵スペースの問題があり、紙管に巻きつけたのは、脆弱なサリー、とくに装飾が多いサリーに限っている。そのほかのサリーは平置きにしているが、よけいな折り目がつかないように、折りの輪の部分には内側から薄い和紙を丸めたものを挟んでいる。

サリーを紙管に巻きつけ、収蔵した状態


紙管に巻きつけた資料は、安心して取り扱える。紙管の部分を利用して吊り下げることもできるので、写真撮影の際には大変便利

折りジワがつかないように輪の部分に和紙を挟んだ資料

特別展の舞台裏

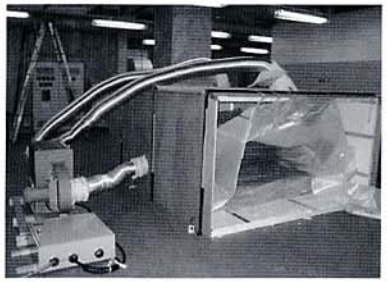
このような作業は、今回の特別展に限ったことではない。毎回いろいろな問題が発生するが、そのたびに保存科学を専門とする研究者が臨機応変に対応し、解決策を見いだしていかなければならない。そして、実務スタッフがそれを実践に移していく。

前回の特別展「きのうよりワクワクしてきた。」では、新しい試みがいくつもあった。そのうちのひとつが、博物館の収蔵資料、リサイクルセンターで見つけてきた資料、建築資材など、経歴の異なる資料を同じ空間に展示することだった。民博で扱っている民族学資料は虫害を受けやすいため、防虫対策にはとくに気をつかっている。民族学資料は、もともと長期にわたる使用を想定していないし、美術工芸品とは異なり、精製された材料というよりも、入手しやすいものでつくられていることが多い。使用痕も重要な学術情報となるため、そのまま残していることも虫害にあいやすい要因になっている。「きのうよりワクワクしてきた。」では、民博の収蔵資料あるいは他館からの借用資料以外は、すべて何らかの殺虫処理をおこなってから展示場に出した。一般資料には二酸化炭素処理、建築資材には加温処理をおこない、前者は二週間、後者は三日間のサイクルでフル稼働し、開幕に間に合わせた。

昨秋の特別展「アラビアンナイト大博覧会」では、フランス国立図書館から借用した貴重図書の展示環境整備が大きな課題だった。温度二〇度±二度、湿度五〇パーセント±五パーセントに保つという厳しい借用条件は、日本の夏では実現不可能である。展示場の空調をこの条件にあわせると、外の環境と極端な差が生じるので、観覧者には寒すぎて、不快な思いをさせてしまう。そこで、本館の日高助手や外部協力者とともに、既存の展示ケースを改造し、そのケース内だけで温度と湿度の制御をおこなうことにした。この可搬型空気循環式恒温恒湿システムは、民博から出願した四件目の特許になった。貴重図書に直接、空調の空気があたらないように、展示ケース内にアクリルケースを置き、そのなかに借用資料を入れた。展示ケースおよびアクリルケース内には外部から温度と湿度をモニタリングできるデータロガーを配置し、毎朝チェックした。さらに安全を期すために、別の一室の空調を借用条件の環境に整備し、いつでも資料を避難させることができる空間を確保した。展示ケースだけでなく別室の環境整備のために、毎日、内部のスタッフが温度と湿度のモニタリング、除湿器の水取りを続けた。その甲斐あって、貴重図書をいれたアクリルケース内の環境は、会期中、借用条件内に維持することができた。

舞台裏の仕事は、観覧者の目には直接届かないが、博物館にとっては生命線といえる。今日も、民博のどこかで、スタッフが協力しあって、展示を楽しんでもらえるよう活躍しているのである。

二酸化炭素処理用大型テント内の一般資料


加温空気による建築資材の殺虫処理。開封されたシート内にあるのが建築資材

表紙モノ語り

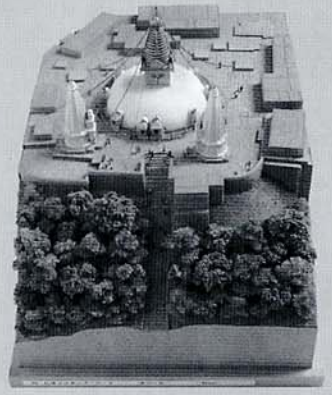
スワヤンブー寺院模型

企画展「模型で世界旅行」出展作品　製作／マンダキニ・シュレスタ、盛口正昭（2002年）　幅19.5cm　奥行28.3cm　高さ19cm

南 真木人
民族社会研究部

カトマンズに暮らす人びとが信仰してやまないスワヤンブー寺院。それが三〇〇分の一に縮小した模型になって、わたしの両手の平の上にのる。神仏にたいして申し訳ない気もするが、こうして見ると、何と端正で美しい寺院だろう。模型には「モンキー・テンプル」の愛称どおり、サルまでいる。

ネパールの寺といえば、儀礼に使う水、赤い粉、花びら、精製バター、ところによっては供犠した動物の血や、群がる鳩の糞でじめじめしていて、どうしても足もとやズボンの裾を気にしながらうつむき加減に歩いてしまう。頭を上げれば今度は、みやげ物を売りこむ人や日本語で話しかけてくる人などに付きまとわれる。それはそれで旅のリアリティだし醍醐味でもあるが、思えばこんなにじっくり「スワヤンブー」を見るのは、初めてのような気がする。



スワヤンブーは正確にはストゥーパ（ブッダの遺骨を納めた仏塔）ではなく、チャイティヤ（礼拝対象としての祠堂）であり、向かって右の塔がブラタッププル寺、左のそれがアナンタプル寺である。建立の年代は明らかでないが、一一世紀の史料にはその存在が記されている。カトマンズ盆地が湖だったころ、文殊菩薩がその一角を刀で断ち切り、湖水が流れ出た大地に最初に現れたのが、スワヤンブー（自ら生じた）神仏なのだと。もっともヒンドゥー教徒のなかには、これをシヴァ神の創造力の象徴であるリンガ（男性性器）として祀る人もいるようだ。多様な神仏が「マンダラ」をなすといわれるカトマンズ盆地にあって、ひときわ高くめだつスワヤンブーは、より聖性をおびた空間なのだ。神の目で、とは畏れ多くていえないが、鳥になったつもりでご覧いただきたい。